

名古屋芸大の学生が尾州でオリジナル生地開発

名古屋芸術大学テキスタイルデザインコース4年生は、JR名古屋高島屋の催事「ニッポンの布しごと」展に参加した。尾州産地と有松・鳴海産地で取り組んだ実習の成果としてのテキスタイル、手ぬぐいを販売した。

「ニッポンの布しごと」展はこれまで4年行ってきた「布しごとマルシエ」を今年から改題し、国内産地にフォーカスした催しにしたもの。教育機



尾州産地で開発した生地を販売
(左が渋谷さん、右が高崎さん)

JR名古屋高島屋 催事展で販売

関では同大が唯一参加した。

尾州産地との取り組みに参加したテキスタイルデザインコース4年生14人は、①ジャカード②飛ばし(長)③飛ばし(短)④裂き布系使いの4班に分かれ、意匠テキスタイルの開発で知られているカナーレ(愛知県一宮市)の指導を受けて、オリジナル生地を製造した。

学生らは機屋など工場見学を経て、「ムードボード」と呼ぶ自らが作りたいいビジュアルを作成。これをもとに糸使いや製織などを考えた。

回展では1席当たり本体3000円で販売したほか、端切れも1000円で販売した。参加した高崎はなのさんは「理想とする『段々畑』の色合いに近づけるために何度も試織した」、渋谷愛美さんは「糸選びに苦労した。織り方によって色の出方が異なる。自分の思い描いているものに向けて何度も製織を繰り返した」などと語った。

このほか有松・鳴海絞産地での実習は、張正とスズサンに協力・製作の指導を仰ぎ、個々のテーマで絞り染めした手ぬぐいを販売した。